

令和3（2021）年度 全国学力・学習状況調査における

士別市の学力等の分析

【令和3年11月29日 士別市教育委員会（学校教育課）】

令和3年度の全国学力・学習状況調査は、令和3（2021）年5月27日が調査実施日であった。士別市（教育委員会）では、小中学校10校全ての学校で実施した。

このたび、文部科学省国立教育施策研究所から「報告書」（5分冊）の提供を受け、今後の学習指導に反映させるため、士別市教育委員会として次のとおり分析結果をまとめた。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取り組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 本調査実施に関する士別市教育委員会の基本的な考え方

士別市教育委員会は、本調査の目的からその意義を認め、定められた方法に従って調査を実施した。

- (1) 調査は、これまで各学校がそれぞれの計画に基づいて実施している標準学力調査などと同様に、通常の教育活動の一環として実施した。
- (2) 調査結果は、学力の特定の一分野であり、本調査により測定できるのは、学校における教育活動の一側面に過ぎないことを踏まえる必要がある。そこで、学校の序列化や過度な競争につながらないように配慮する視点から、学校ごとの結果は公表はしないが、士別市における学力傾向を明確化し、今後の授業改善等に資するために、士別市全体としての数値結果を公表する。
- (3) 教育委員会と各学校は、児童生徒の学力・学習状況のそれぞれの課題を把握・検証することによって、より適切かつ充実した教育活動を図る。

3 調査実施日

令和3（2021）年5月27日（木曜日）

4 調査対象

- (1) 小学校 6年生
- (2) 中学校 3年生

5 調査の内容

(1) 教科に関する調査

① 国語、算数・数学

(ア) 身に付けておかなければ、後の学年の学習内容等に影響を及ぼす内容や実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等

(イ) 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査問題は学習指導要領（小学校調査においては平成29年告示、中学校調査においては平成20年告示）に示された目的及び内容等に基づいて作成。

(2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

① 児童生徒に対する調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

② 学校に対する調査

指導方法に関する取り組みや人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問紙調査

6 本市の参加状況

	小学校		中学校		総 数	
	学校数 (校)	児童数 (人)	学校数 (校)	生徒数 (人)	学校数 (校)	児童生徒数 (人)
国 語	6	120	4	117	10	237
算数・数学	6	120	4	117	10	237

7 教科に関する調査の結果

令和3年度の調査結果

	平均 正答率	小学校		中学校	
		国語	算数	国語	数学
全 国	%	64.7	70.2	64.6	57.2
全 道	%	63	67	65	56
士別市	%	64	70	64	53

※文部科学省から提供される平成29年度以降の都道府県及び市町村のデータは、小数点以下が四捨五入されている。

令和元年度の調査結果（令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により悉皆調査未実施）

	平均 正答率	小学校		中学校	
		国語	算数	国語	数学
全 国	%	63.8	66.6	72.8	59.8
全 道	%	63	64	72	58
士別市	%	64	64	69	52

平成30年度の調査結果（令和3年度の中学3年生が小学6年で実施の結果）

	平均 正答率	小学校国語		小学校算数	
		A問題	B問題	A問題	B問題
全 国	%	70.7	54.7	63.5	51.5
全 道	%	70	53	62	49
士別市	%	69	53	62	49

8 士別市の学力調査の結果

(1) 全体

士別市全体として、小学校は、全道の平均正答率〈以下「全道平均」と表記〉を国語・算数ともにやや上回り、全国の平均正答率〈以下「全国平均」と表記〉とほぼ同程度であった。

中学校は、国語が全道平均をやや下回り、全国平均とほぼ同程度で、数学は全道平均から3ポイント、全国平均からは4ポイント程度下回る結果であった。

なお、令和2年度は、学力についての悉皆調査は行われていないので、参考値として令和元年度の調査データを掲載した。また、令和3年度の中学3年生は、平成30年度の小学6年生時において、本調査を受けていることから、参考として当時の調査データを掲載した。

(2) 小学校

①【国語】

令和元年度の調査では全国平均を若干上回っていたが、今年度はやや下回る結果となった。次頁に今年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示した。

領域別では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「書くこと」で、全国・全道平均を上回っているが、「話すこと・聞くこと」「読むこと」では全国・全道平均を下回った。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
言葉の特徴や使い方に関する事項	69.6	67.1	68.3
話すこと・聞くこと	75.0	75.4	77.8
書くこと	62.5	60.4	60.7
読むこと	41.7	45.2	47.2

問題別では「漢字を文の中で正しく使う」問題や文中の「主語と述語の関係」「修飾語と被修飾語の関係」についての問題の正答率が高かった。一方、「目的に応じ文章と図表とを結び付けて必要な情報を見付ける」問題や「目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約する」問題については正答率が低かった。無解答率については、全国・全道平均と比較して、ほぼ全問で低い傾向にある。

②【算数】

令和元年度の調査では全国平均を下回っていたが、今年度はほぼ同等の結果であった。下に今年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示した。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
数と計算	66.9	59.4	63.1
図形	58.3	54.0	57.9
測定	74.7	72.4	74.8
変化と関係	72.5	72.5	75.9
データの活用	74.0	75.0	76.0

領域別では「数と計算」「図形」で全国・全道平均を上回っているが、「測定」「変化と関係」は全国平均を下回り、「データの活用」では全国・全道平均を下回った。

問題別では「直角三角形を組み合わせた図形の面積」「データを二次元の表に分類整理」「余りのある除法の商」「商が1より小さくなる等分除」等の問題での正答率が高かったが、「速さを求める除法の式と商の意味」を問う問題や「複数の図形を組み合わせた図形の面積について量の保存性や量の加法性を基に捉え、比べる」問題、「帯グラフで表された複数のデータを比較し、示された特徴をもった項目とその割合を記述」する等の問題での正答率が低かった。

無解答率については、全国・全道平均と比較して低い傾向にあるものの、理由を説明する問題等で割合は高くなっている。

(3) 中学校

①【国語】

今年度の調査では、全道平均をやや下回るが、全国平均とほぼ同程度の結果であった。下に今年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示した。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
話すこと・聞くこと	82.1	79.7	79.8
書くこと	53.6	56.9	57.1
読むこと	45.1	48.2	48.5
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	77.1	75.2	75.1

領域別では「話すこと・聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で、全国・全道平均を上回っているが、「書くこと」「読むこと」では全国・全道平均を下回った。

問題別では「文脈に即して漢字を正しく読む」問題や司会として「話合いの話題や方向を捉える」「質問の意図を捉える」問題等の正答率が高かった。一方、「文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考え」を記述する問題や「相手や場に応じて敬語を適切に使う」問題等については正答率が低かった。

無解答率については、全国・全道平均と比較して、全問題で低い傾向にはあるが、記述式の問題において無解答率が非常に高くなっている。

②【数学】

今年度の調査では、全道平均から3ポイント、全国平均からは4ポイント程度下回っている。下に今年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示した。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
数と式	59.1	62.5	64.9
図形	47.0	51.3	51.4
関数	57.5	55.6	56.4
資料の活用	46.2	52.3	53.8

領域別では、「関数」の問題で全国・全道平均を上回っているが、他の3つの領域では全国・全道平均を下回った。

問題別では「与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取る」問題や「問題場面における考察の対象を明確に捉える」問題について正答率が高かった。しかし「データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する」問題や「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する」問題等、説明や証明を記述する問題については、他の問題に比較して無回答率が高く、正答率も低い傾向であった。

9 学習状況調査の結果〈児童生徒質問紙〉

学習状況調査については、文部科学省が「報告書」において経年変化を比較分析している。その中で、今年度調査において顕著な傾向が見られる質問項目について、本市の結果を抜粋し、全国平均と比較しながら分析した。また新たに加わった質問項目についても分析を加えた。

(1) 基本的な生活習慣等（5項目）

- ①「普段（月曜日から金曜日）、1日当たり1時間以上、テレビゲーム（携帯式のゲームやスマートフォンを使ったゲームも含む）をする」と回答している児童生徒の割合は調査開始年度に比べ増加傾向にある。今年度の調査では、本市の小学生は76%で全国平均とほぼ同値、中学生は90%で全国平均よりも10ポイント程度高い。
- ②（今年度新たに加わった項目で）「携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている」と回答した本市の小学生は87%、中学生は88%で、ともに全国平均よりかなり高い。
- ③他の項目については、調査開始年度と比較して大きな変化は見られない。

(2) 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等（11項目）

- ①「将来の夢や目標を持っている」と回答した小学生は、全国平均で微減、中学生は調査開始年度と比べて大きな変化はない。本市では、小学生が88%と全国平均より7ポイントほど高く、逆に中学生は62%と全国平均より7ポイントほど低い。
- ②（今年度新たに加わった項目）「自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができる」（小学生70%・中学生75%）「自分と違う意見について考えるのは楽しい」（小学生70%・中学生75%）「友達と協力するのは楽しい」（小学生94%・中学生93%）
本市におけるこれらの項目は、小学生については全国平均よりやや低く、中学生は全国平均よりもやや高い。
- ③他の項目については調査開始年度と比べて大きな変化は見られない。

(3) 学習習慣、学習環境等（8項目）

- ①「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たり1時間以上勉強をしている（学習塾や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」と回答した児童生徒は増加傾向にある。小学生では顕著な差はないが、中学生では「2時間以上勉強している」状況については、全国平均の54%に対して、本市では28%と差が大きい。

- ②平日の学習時間についても「1時間以上勉強をしている」と回答した児童生徒は微増傾向にあり、本市の小中学生ともに全国平均と大きな差はない。しかし中学生では「2時間以上勉強している」との回答は、全国平均の42%に対して、本市は15%と差が大きい。
- ③（今年度新たに加わった項目）「家で自分で計画を立てて勉強している」（小学生74%・中学生64%）については、本市では小学生が8ポイント高く、中学生は5ポイント低い。
- ④他の項目については、調査開始年度と比べて大きな変化は見られない。

(4)地域や社会に関わる活動の実施状況等（2項目）

- ①「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べて増加傾向にある。小学生の全国平均が52%であったのに対し、本市では62%、中学生は全国平均の44%に対し、本市では38%となっている。
- ②「今住んでいる地域の行事に参加している」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べて大きな変化はないものの、前回調査に比べると減少している状況にある。小学生の全国平均が58%、本市では66%、中学生は全国平均が44%、本市では39%となっている。

(5)ICTを活用した学習状況（4項目）

- ①「授業でコンピュータなどのICT機器を週1回以上使用している」と回答した小学生の割合は、前年度調査（新設）に比べて高く、中学生には大きな変化は見られない。小学生の全国平均が40%であるのに対し、本市では58%、中学生は全国平均が33%、本市では32%となっている。
- ②今年度、新たに調査した内容については次のとおり。

質 問 項 目		全国	士別市
学校でコンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	小学生	39%	55%
	中学生	35%	26%
学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う。	小学生	95%	98%
	中学生	93%	90%
普段（月曜日から金曜日）1日当たり30分以上、スマートフォンやコンピュータなどのICT機器を勉強のために使っている。	小学生	42%	38%
	中学生	43%	51%

(6)主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況（8項目）

- ①「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べて増加している状況にある。小学生の全国平均は79%であるのに対して、本市では87%、中学生は全国平均が78%であるのに対して、本市では74%となっている。
- ②調査開始年度から設定している他の項目については大きな変化は見られない。
- ③今年度、新たに調査した内容については次のとおり。

質 問 項 目		全国	士別市
授業で友達（生徒）の間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考えを受け止めて自分の考えをしっかりと伝えていた。	小学生	83%	94%
	中学生	84%	81%
授業で各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめたり、思いや考えをもとに新しいものを作り出したりする活動を行っていた。	小学生	67%	72%
	中学生	59%	65%
授業は自分にあった教え方や教材、学習時間などになっている。	小学生	81%	86%
	中学生	75%	74%
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。	小学生	78%	80%
	中学生	75%	76%

(7)総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳（4項目）

- ①「総合的な学習の時間で、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」「学級で学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」と回答した児童生徒は増加傾向にある。
- ②「道徳の授業では自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」と回答した小学生の割合について大きな変化はないが、中学生では増加傾向が見られる。小学生の全国平均が81%であるのに対して、本市では90%となっており、中学生では全国平均が86%、本市は79%であった。
- ③他の項目については、調査開始年度と比べ、大きな変化は見られない。

(8)国語の学習に対する興味・関心や授業の理解度等（9項目）

- ①「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童生徒は、調査開始年度と比べて若干の増加傾向が見られるが、中学生は前回調査から低くなっている。小学生は、全国平均、本市ともに81%であり、中学生は、全国平均が74%であるのに対して、本市71%となった。
- ②その他「国語の勉強は好きだ」「国語の勉強は大切だ」「国語の授業はよくわかる」等の項目は、調査開始年度と比べ、大きな変化はない。
- ③今年度、新たに調査した内容については次のとおり。

質 問 項 目		全国	士別市
国語の授業では、言葉の特徴や使い方についての知識を理解したり使ったりしている。	小学生	82%	88%
	中学生	82%	81%
国語の授業では、目的に応じて、自分の考えを話したり必要に応じて質問したりしている。	小学生	64%	76%
	中学生	61%	58%
国語の授業では、目的に応じて、自分の考えとそれを支える理由との関係が分かるように書いたり表現を工夫して書いたりしている。	小学生	72%	75%
	中学生	75%	79%
国語の授業では、目的に応じて文章を読み、感想や考えを持ったり（内容を解釈して）自分の考えを広げたり深めたりしている。	小学生	74%	85%
	中学生	77%	75%

(9)算数・数学の学習に対する興味・関心や授業の理解度等（9項目）

①「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べ、増加傾向にある。小学生の全国平均が80%であるのに対し、本市では75%、中学生では全国平均が58%であるのに対し、本市では55%となった。

②「算数（数学）が好きだ」「算数（数学）の勉強は大切だ」「算数（数学）の授業で学習したことは将来社会に出たとき役に立つ」等の項目については、小学生では調査開始年度と比べて大きな変化はないが、中学生では若干の増加傾向にある。

③今年度、新たに調査した内容については次のとおり。

質 問 項 目		全国	士別市
算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている。	小学生	89%	94%
	中学生	84%	83%
算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている。	小学生	92%	95%
	中学生	86%	92%

(10)英語の学習に対する興味・関心や授業の理解度等（3項目）

①今年度、新たに調査した内容は、小学校で3項目、中学校では1項目であった。中学校の2項目については、前回調査で新設されたものである。内容については次のとおり。

質 問 項 目		全国	士別市
英語の勉強は好きだ。	小学生	68%	76%
	中学生	57%	64%
英語の授業では、英語で自分自身の考えや気持ちを伝え合うことができている。	小学生	75%	81%
	中学生	68%	75%
これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会があった。（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書くなど）	小学生	44%	41%
	中学生	35%	27%

(11)新型コロナウイルス感染症の影響（4項目）

- ①今年度、新型コロナウイルス感染症の児童生徒への影響について、小中共通で4項目が新たに加えられた。
- ②「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、学校からの課題で分からないことがあったとき」の対処法としては、全国・本市ともに、小学生では「家族に聞く」が最も多く、中学生では「自分で調べる」が最も多かった。
- ③他の新設3項目の内容については次のとおり。

質 問 項 目		全国	士別市
新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じた。	小学生	55%	60%
	中学生	63%	62%
新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、計画的に学習を続けることができた。	小学生	65%	63%
	中学生	38%	32%
新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、規則正しい生活を送っていた。	小学生	63%	70%
	中学生	48%	52%

(12)各教科の調査時間の適正（2項目）

調査問題の解答時間については令和元年度調査で新たに加わった項目であり、小学国語、小学算数、中学数学では大きな変化は見られず、中学国語で「解答時間が十分でない」の割合が増えている。

質 問 項 目		全国	士別市
国語の解答時間が「やや足りない」と「全く足りない」を合わせた割合。	小学生	29%	19%
	中学生	25%	27%
算数（数学）の解答時間が「やや足りない」と「全く足りない」を合わせた割合。	小学生	18%	18%
	中学生	19%	22%

10 学習状況調査の結果〈学校質問紙〉

各学校長が自校の学習状況調査について回答する「学校質問紙」について、今回はwebシステム上で直接入力する形で実施された。質問項目は年々増え、今年度の調査では、次の15分類、総質問合計数は135項目に及んでいる。この中で、学習評価やICT、新型コロナウイルス感染症等に関する83項目が今年度に新設された質問である。

- 1 生徒指導等(5項目)
- 2 学校運営に関する状況／教職員の資質向上に関する状況(17項目)
- 3 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況(12項目)
- 4 総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科 道徳の指導方法(4項目)
- 5 学習評価(4項目)
- 6 国語の指導方法(6項目)
- 7 算数・数学科の指導方法(6項目)
- 8 英語科の指導方法(2項目)
- 9 ICTを活用した学習状況(13項目)
- 10 特別支援教育(1項目項目)
- 11 小学校教育と中学校教育の連携(3項目)
- 12 家庭や地域との連携(5項目)
- 13 家庭学習(3項目)
- 14 全国学力・学習状況の結果等の活用(18項目)
- 15 新型コロナウイルス感染症の影響(36項目)
- * 学校規模（学級数、児童生徒数、教職員数、等）について（6項目）

今年度の学校質問紙調査において、全国平均と本市の結果を比べて顕著な相違等が見られる質問項目について次に示す。

質 問 項 目		全国	士別市
児童（生徒）は、授業では課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができている。	小学生	85%	67%
	中学生	86%	100%
児童（生徒）は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができている。	小学生	33%	67%
	中学生	75%	75%
児童（生徒）は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができている。	小学生	82%	50%
	中学生	87%	100%
教員がコンピュータなどのICT機器の使い方を学ぶために必要な研修機会がある。	小学生	85%	100%
	中学生	78%	100%

質 問 項 目		全国	士別市
I C T機器の活用に関して、学校に十分な知識をもった専門スタッフ（教員は除く）がいるなど技術的にサポートできる体制がある。	小学生	54%	17%
	中学生	52%	0%
児童（生徒）一人一人に配備されたP C・タブレット等の端末を、家庭に持ち帰らせることがある。	小学生	21%	0%
	中学生	21%	0%
平成31年度（令和元年度）の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の小学校（中学校）と成果や課題を共有した。	小学生	48%	67%
	中学生	49%	75%
地域学校協働本部やコミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人との協働による活動を行った。	小学生	73%	100%
	中学生	63%	100%
前年度までに、家庭学習の取組として、学校では児童（生徒）に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えた。	小学生	96%	83%
	中学生	92%	100%
新型コロナウイルス感染症の影響による臨休期間に学校が作成した学習動画等を活用した学習を行った。	小学生	23%	0%
	中学生	27%	25%
新型コロナウイルス感染症の影響による臨休期間に双方向のオンライン学習を行った。	小学生	6%	0%
	中学生	7%	0%
新型コロナウイルス感染症の影響前（令和2年3月以前）と現在（令和3年5月）とを比較して、教員の業務量は増えた。	小学生	78%	100%
	中学生	81%	100%

11 まとめと課題

国際的な学力調査のPISA（Programme for International Student Assessment/生徒の学習到達度調査:OECD）やTIMSS（国際教育到達度学会が実施の「国際数学・理科教育調査」/ Trends in International Mathematics and Science Study）における日本の子どもたちの結果が上位から下降の傾向にあったこと（PISAショック）が危惧されたころに始まった本調査も、10数年を経て、平成31（令和元）年度調査からA問題（基礎・基本）、B問題（習得・活用）の区別がなくなり、今年度調査では小中ともに問題数も国語14題、算数・数学16題と減っている。この結果、問題1題当たりの正答率ポイントは6～7ポイント程度となっている。正答数±1題の範囲は公教育の格差としては小さい。

小学校では国語、算数ともに下回ってはいるがほぼ全国平均に並ぶ結果となっている。しかし、学校間で若干の差が見られるところであり、クラウド上の共有ドライブや1人1台端末を効果的に活用し、教材や練習問題、家庭学習課題の共同開発と利用によって補っていくなどの取組も必要と考えられる。また、説明や理由を書く問題の正答率や無回答率は全国同様、課題である。今後実施されるであろうCBT（Computer Based Testing）化に対応する「PCを活用した」学習と、「筆記具を使って、考えをまとめて書く」学習を各教科で工夫する必要がある。

中学校では、国語において全道平均を下回ってはいるものの、ほぼ全国平均となっているが、数学においては4ポイントほど低い。平成30年度調査（小6算数A・B）に比べても、全国平均との差が開いている。領域別では「図形」「資料の活用」の学習を定着させることが必要である。また、説明や証明を書く問題の正答率や無回答率は継続的な課題となっており、高校入試においても出題頻度が高いことから、特に身につけるべき事項であるとの意識のもと、意欲的に取り組ませたい領域である。

「児童・生徒質問紙」「学校質問紙」による学習状況の調査は、徐々に質問項目を増やし、今年度調査ではICTを活用した学習状況や新型コロナウイルス感染症の影響等の新設項目が数多く設定されている。

全国平均に比べ、本市の児童生徒は、PCゲームやスマートフォン等を使用する時間が長いものの、約束事を守っているという回答は全国平均を上回っている。家庭学習については、「1時間以上」の部分では全国平均と変わらないが、中学生においては「2時間以上」となると差が大きくなっている。特に中学3年生としては、家庭学習の時間が不足をしていると言わざるを得ない。

授業でのICT機器の活用について、本市では、全国平均に比較して小学校での利用度は高いが、中学校ではやや下回る結果となっている。こうした中、1人1台端末の配備によって、次年度以降の状況は変わってくると考えられる。端末の家庭への持ち帰りについては、通信環境や通信料負担などの課題もあり、今後の課題である。現在、本市においては、中心市街地と朝日地区の一部を除いて光ファイバー通信網が整備されていないが、来年には全市域での光通信が可能となる場所である。この機会に、各家庭での通信環境の向上が図られると、家庭学習での活用促進が期待されるところである。

「学校質問紙」については、小学校6校、中学校4校と調査母体が少ないので、質問項目毎のパーセンテージは参考値として押さえ、今後、各学校の学力調査と児童生徒質問紙のクロス集計の分析がなされ、授業改善等に反映することを期待したい。

12 今後の対応

今年度の調査結果について、教育委員会会議で報告・説明し、今後の対応等について協議した。

(1) 今後の学習に向けて

国語の問題では、小学生・中学生ともに書く問題（30～60字程度）の正答率が低く、無回答率も高い。このことは士別市の児童生徒だけではなく、全道・全国の傾向でもある。書く問題への苦手意識を払拭し、正答率を上げることが難しいことは、全国学力・学習状況調査の開始以降、同様の傾向が続いている。文を書くという行為は、「書き取り」や「記号の選択問題」に比べると遙かにレベルが高い。しかし、高校入試の問題であれば、漢字の書き取りや読みは1問2点、記述問題は1問4～6点と、配点差があるとともに、毎年2題程度の書く問題の出題がある。書く問題への対応は、義務教育終了までに是非とも高めたい力の一つである。

また、国語力を上げるためには、語彙力の向上が必須である。語彙力を上げる機会は国語科の時間だけではない。日常生活（家族との会話、テレビや動画の視聴、読書、他教科の授業…）すべてにおいて語彙力アップにつながりうる。日常会話で使っている言葉、新しく目にした、あるいは耳にした言葉に敏感になり、「どんな字なのか」「どんな意味があるのか」などを調べ、語彙力を高める姿勢をぜひ持たせたい。辞書を活用するだけではなく、PCや今年度から配布の1人1台端末を効果的に活用することによっても、語彙力を高めるための一方策としたいものである。

算数では、基礎的な計算問題はよくできているが、文章による問題の説明と提示された表、グラフ、図などの資料から、必要な情報を読み取り、題意に合う解答を導き出す問題への課題がある傾向が出ている。

右の図①は現在の中学3年生が小学6年生の時、本調査で出題された「同面積のシートに座る人数で組み合わせ方を比較する問題」（平成30年算数A）である。本市児童の正答率は55.4%にとどまっております。出題の内容よりも、図表が提示される問題に対する苦手意識を持っていることを示す出題例である。

こみぐあいについて、次の問題に答えましょう。

図①

(1) アとイの2つのシートがあります。アとイのシートの面積は、同じです。

ア

4 m^2

イ

4 m^2

次の表は、シートの上にすわっている人数とシートの面積を表しています。

すわっている人数とシートの面積		
	人数 (人)	面積 (m ²)
ア	6	4
イ	9	4

上の表から、こみぐあいについてどのようなことがわかりますか。
下の 1 から 3 までの中から 1 つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 アのほうがこんでいる。
- 2 イのほうがこんでいる。
- 3 どちらもこみぐあいは同じである。

右の図②は「バスの時刻表から条件に合うバスの時間を見付ける問題」（平成21年算数B）である。本市の正答率は33.2%となっている。内容的には算数科の時間計算の問題ではあるが、小学校高学年であれば対応可能な日常の問題として処理したいところだ。しかし、3割程度しか正答率がなかったのは、図表と文章から必要な情報を得て、それを検証する作業ができなかったためである。これは国語科において苦手とする「複数の資料から必要な情報を得て、それをまとめる問題」にも共通する手順である。他教科の様々な場面で、この問題を処理する力を伸ばしたい。

右の図③の問題は、今年度の算数で出題された「三角形の面積を求める問題」で、正答率は48.3%であった。三角形の面積を求める公式は覚えていたが、「高さ」を決めかねたためか、「 $3 \times 4 \times 5 \div 2$ 」または「 $3 \times 4 \times 5$ 」と、各辺の3数を使った誤答の解答類型が、本市児童では30.8%もあった。正答率が低かったことよりも、誤答の類型が集中していたことを今後の指導課題と捉えるべきと考える。

右の図④の問題は、今年度の数学で出題された「中央値を求める問題」である。解答は53と55の間の「54」が中央値となる。本市生徒の正答率は65.8%で、全道平均の84.6%、全国平均の84.5%を大きく下回っている。また誤答の解答類型では「53または55」に21.4%

よう子さんたちは、港博物館に行くことにしました。

図②

(1) よう子さんたちは、バスに乗って港博物館に行きます。
下の表は、乗車するバス停の時刻表の一部です。

時	港博物館行き時刻表			
6	10	40		
7	10	40		
8	10	30	50	
9	10	25	45	55
10	10	25	45	55
11	10	30	50	

朝いちばん早いバスは、午前6時10分です。その次のバスは、午前6時40分です。

よう子

このバス停には、午前9時40分に集合します。
港博物館までは、バスで20分かかります。
午前10時20分までに、港博物館に着くためには、午前何時何分に発車する予定のバスに乗ればよいですか。その時刻をすべて書きましょう。

図1のような直角三角形があります。

図③

図1

(1) 図1の直角三角形の面積は何 cm^2 ですか。
求める式と答えを書きましょう。

5 下の記録は、ある中学校の男子生徒10人が反復横とびを20秒間行ったときの結果を、回数の少ない方から順に並べたものです。

記録

43	46	46	52	53	55	56	56	56	57
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

(単位：回)

反復横とびの記録の中央値を求めなさい。

図④

が集中している。この問題は、学習指導要領の改訂で移行された代表値（平均値、最頻値、中央値）の問題である。このため2020年度の中学2学年で学習する移行措置内容である。正答率の低さは、移行措置の学習内容が十分に定着していないことを示していると考えられる。

(2) 授業改善のヒント

【国語の学習】

- ①「読むこと」と「書くこと」をリンクした学習
 - ・様々な文種（歴史、科学、小説、評論、報道、取説…）の文章を読む機会を持たせ、概要を要約する練習など
- ②条件をつけて短作文を書く学習
 - ・例示を入れた文を書く、理由を説明する文を書く、などの練習
- ③主語・述語のある文（主述の関係が成り立つ文）の吟味
 - ・主語や述語がない文に、それらを補う練習
- ④主語や述語にいろいろな修飾語を付け加えていく練習
 - ・短文に修飾語を加え、修飾・被修飾の関係をつかむ
- ⑤「書くこと」と「話すこと」をリンクした学習
 - ・日常的に自分の考えを簡単にまとめ、要領よく話す練習
- ⑥実践的に敬語を使う場面や経験を設定
 - ・地域学習、社会見学等で、目上の人と話す機会を設定するなど
- ⑦語彙量の不足を補う
 - ・1人1台端末を活用し、日常使っている言葉や、テレビや雑誌等で目や耳にした言葉の漢字表記や正しい意味や用法を知る

*特に中学校ではこれらの学習に加え次の3点を加える。
- ⑧漢字の表記や字形に気を配り、読みやすい文章を書く練習
 - ・読み手が読みやすい文章を書く、敬語を使って文章を書く、などの練習
- ⑨国語便覧を活用
 - ・国語的な基礎知識の習得（文学史、故事成語、四字熟語…）
- ⑩授業で使用しているワークブックの反復による学習
 - ・授業で間違えた部分やできなかった部分の直し

【算数・数学の学習】

- ①問題で何が求められているのか、読み取る力を高める
（答えを求めているのか、立式をなのか、求め方を説明するのか…）
- ②与えられた3数（またはそれ以上）から、必要な2数を使って計算する文章問題を解く練習
- ③移行措置の学習内容について定着を確認
- ④下学年の問題を文章化や資料化した問題の練習
- ⑤図形の問題では、問題の図を「90度、180度と回転させて見る」「補助線を引く」など視点を変えて見る習慣を持たせる
- ⑥記述問題への苦手意識の払拭
 - ・授業の中で、計算や立式、答えのみではなく、「解法の道筋やヒントを板書する」→「ノートにまとめさせる」などの書く学習場面をつくる
 - ・家庭学習に、解法の思考過程を記述する課題を出す

- * 特に中学校ではこれらの学習に加え次の3点を
- ⑦証明問題への無回答率0を目指す指導方法の工夫
 - ・段階的に記述する量を増やす（穴埋め、箇条書き、文章化…）
- ⑧移行措置：2020年度の中学2年（現中学3年生）で扱う資料や統計を使った問題の再確認
 - ・四分位範囲、箱ひげ図（中央値、最大値、最小値）
- ⑨教科書の章末問題や授業で使用するワークブックの問題の書き直し

(3)今後の学習環境構築に向けて

本市の児童生徒の睡眠や朝食といった基本的な生活習慣については良好であり、全国平均をやや上回っている。スマホやタブレット、ゲーム機の利用時間については全国平均を上回っていることは危惧されるが、利用についての家庭での約束事を守ることも全国平均を上回っている。今後も利用時間やマナーについて家庭と学校が協力して指導し、ネットトラブルを防ぎたい。

児童生徒質問紙と学校質問紙の回答結果から、本市の課題を以下に挙げる。

*（ ）内の数字は児童生徒質問紙および学校質問紙の番号を表している。

【教師（校長・教頭）の意識と児童生徒の思いとの乖離】

①授業での自主的な課題解決

「（5年生までの・中学1～2年までの）授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」（児童生徒33・学校29）

・「当てはまる・やや当てはまる」と答えた土別の児童は84.1%、土別の生徒は82.9%であるのに対して、「当てはまる・やや当てはまる」と答えた土別の小学校は66.7%で、土別の中学校は100%であった。

*土別の児童の自己評価に比べ、学校側の評価はやや厳しく、中学校ではその逆の結果という乖離がある。）

②学習の深化・発展

「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」（児童生徒37）

・「当てはまる」と答えた土別の児童は40.8% 土別の生徒33.3%

「調査対象学年の児童に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」（学校36）

・「当てはまる」と答えた土別の小学校は33.3% 土別の中学校75%

*小学校に比べて中学校では減っているが、学校側の評価は中学校の方が高いという齟齬が見られる。（生徒の自己評価に比べ、学校の指導に対する評価が高いという乖離がある。）

③自己有用感

「自分には、よいところがあると思いますか」（児童生徒6）

・「当てはまる」と答えた土別の児童は28.3% 土別の生徒31.6%

「調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学校生活の中で、児童（生徒）一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する（褒めるなど）取組を行いましたか」（学校11）

・「当てはまる」と答えた土別の小学校は83.3% 土別の中学校100%

*児童生徒の自己有用感と、学校生活の中でよい点や可能性を見つける取組に差がある。

④将来の夢や目標

「将来の夢や目標を持っていますか」（児童生徒7）

・「当てはまる」と答えた土別の小学校は33.3% 土別の中学校75%

「調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか」（学校8）

・「当てはまる」と答えた土別の小学校は33.3% 土別の中学校100%

* 小中間で、児童生徒、教師ともに差が見られる。小学校では引き続きキャリア教育の充実が求められる。

【「小学生の学習」と「中学生の学習」の違い】

①学習の計画性

「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）」（児童生徒17）

・「よくしている」と答えた土別の小学校は40.8% 土別の中学校16.2%

* 小学校は全国平均よりも9.6ポイント高く、中学校は3.2ポイント低い。
全国での傾向が本市では一層顕著に見られる。（中学生の家庭学習の指導に工夫が必要）

②学習時間

「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」（児童生徒18）

1時間以上の小学生57.5%（全国平均62.5%）

中学生65.0%（全国平均75.9%）

2時間以上の小学生11.7%（全国平均26.9%）

中学生14.6%（全国平均41.8%）

* 普段（月曜日から金曜日）の家庭学習については、学校での指導の工夫と家庭への啓蒙を努めたいところである。

13 おわりに

学校における学習内容については、各学校が全道・全国の傾向を踏まえ、本市の分析を参考に、自校の結果を細かく見直し、授業の工夫・改善によって、身に付けたい力や抜け落ちた力を補ってほしい。

家庭学習については全道・全国平均を大きく下回っているので、家庭の協力を得て平日の児童生徒の家庭学習を促すとともに、1人1台端末を有効活用する等、効果的な家庭学習の方策や内容を工夫する必要がある。特に本市を含め上川北部の中学生は、地域の各高校が定員割れとなり、高校入試が学習の動機と繋がりにくい進学状況のため、将来を見据えたキャリア教育を充実させ、意欲的に学習に取り組ませたい。

教育委員会は引き続き本市の「土曜子ども文化村」「チャレンジ寺子屋」などの独自事業の発展的継続や、公民館の家庭教育支援事業などの社会教育事業の充実を図り、生涯学習の観点からの取り組みを一層推進させる。